

THE EVENING NEWS I
ARTHUR HAILEY

ニュースキャスター

I

アーサー・ヘ

永井 淳 訳

蘇工業学院图书馆

藏书章

Evening
New

新潮社

THE EVENING NEWS

By Arthur Hailey

Copyright © 1990 by Arthur Hailey

Japanese translation rights arranged with Doubleday & Company, Inc., New York through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

ニュースキャスター (I)

アーサー・ヘイリー ^{なが い} 永井 ^{じゆん} 淳訳

印刷 1990.10.20 発行 1990.10.25

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社 郵便番号162/東京都新宿区矢来町71 / 振替東京4-808

電話: 業務部 (03) 266-5111

編集部 (03) 266-5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

© Jun Nagai 1990, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り

下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-507505-5 C0097

T H E E V E N I N G

N E W S

ニ
ュ
ー
ス
キ
ャ
ス
タ
ー
(I)

シーラとダイアンに、

そして

わたしを信頼してオフレコの

情報を提供してくれた

メディアの世界の多くの友人たちに、

特別な感謝の念をこめて。

著者覚書——一九七一年に刊行されたフレデリック・フォーサイス氏の小説、『ジャッカルの日』で、暗殺者はイギリスの偽造パスポートを手に入れる。『ニュースキャスター』においても、テロリストがこのようなパスポートを入手する——もつともその方法は異なり、描写はわたし自身の取材の産物である。

とはいうものの、このことに関して先鞭をつけたのはフォーサイス氏であることを一言お断わりしておきたい。——A・H

装画 佐野一彦

第一部

ニューヨークのCBAテレビジョン・ニュース本部に、事故に遭ったエアバスA300が、火災を起こしながらダラス・フォート・ワース空港に接近しつつあるという第一報が入ったのは、〈ナショナル・イヴニング・ニュース〉の第一版放送開始わずか数分前のことだった。

東部夏時間の午後六時二十一分に、CBAのダラス支局長から、ニューヨークの「蹄鉄」のあ
るプロデューサーに、スピーカーフォンを通してつぎのような連絡が入った。「DFW（ダラス・
フォート・ワース空港）で大墜落事故が起きそうなんだ。空中衝突事故があつてね——小型機と満
員のエアバスの。小型機は墜落した。エアバスのほうは火災が発生して、いま緊急着陸を試みよう
としているところだ。警察と救急車の無線が飛び交っているよ」

「そりゃおおごとだー」と、「蹄鉄」の別のプロデューサーがいった。「映像は間に合うのか
な？」

「蹄鉄」とは、十二人が坐れる超大型デスクのことで、CBAネットワークの看板であるニュー
ス番組のプランニングと仕込みが、ウィークデイの早朝から夜の放送時間の最後の一秒まで、一日
も欠かさずにおこなわれている場所だった。ライヴァル局のCBSではその場所が「金魚鉢」と
呼ばれ、ABCでは「外縁」、NBCでは単に「ザ・デスク」と呼ばれていた。名称はどうあれ、

その機能はどの局でも同じだった。

ここには、ニュースに関する判断と決断という点では、局内の最もすぐれた頭脳が集まっているといわれている。すなわちエグゼクティヴ・プロデューサー、ニュースキャスター、シニア・プロデューサー、ディレクター、エディター、ライター、グラフィックス・チーフ、そしてそれぞれのアシスタントたちといった顔ぶれである。そこにはまた、オーケストラを構成する楽器群のように、六台のコンピュータ端末機、通信社のプリンター、最新の機能をそなえたおびただしい数の電話機、未編集のテープやその日の放送用に用意されたニュースの一部から、ライヴアル局の映像にいたるまで、ありとあらゆるものを瞬時に映しだせるモニター・テレビ群などがそなわっていた。

「蹄鉄」^{ホースシュー}はCBAニュース・ビル四階の、片側に部屋がずらりと並んだ中央オーブン・スペースにあった——それらの部屋は、《ナショナル・イヴニング・ニュース》の上級スタッフ^{ホースシュー}が、一日のうちのさまざまな時間帯に、より静かな仕事場を求めてしばしば熱気渦巻く「蹄鉄」から避難する場所だった。

今日も、おおかたの日と同じく、「蹄鉄」^{ホースシュー}の上手で指揮をとっているのはエグゼクティヴ・プロデューサーのチャック・インゼンだった。瘦身に気の短いこの男は、若いころ新聞社で働いた経歴を持つヴェテラン報道人で、国際ニュースよりも国内ニュースを重視するという、やや偏った好みの持主だった。五十五歳というインゼンの年齢は、テレビ界の標準からすれば老齢の部類に属していたが、ふつうなら二年で燃えつきてしまう仕事を四年もやっているのに、エネルギーの衰えをまったく感じさせなかった。チャック・インゼンはその気になれば不愛想にもなれる人間だった。事実彼はしばしば不愛想だった。ばかげた真似や無駄話は決して黙認しなかった。理由はただひとつ、仕事が忙しすぎてそんな暇がなかったからである。

いまこの瞬間——九月中旬の水曜日——忙しさはピークに達していた。この日も早朝から、《ナショナル・イヴニング・ニュース》の番組構成、つまりとりあげるニュースの項目選定とその重要

度が、評価され、討論され、修正され、そして最終的に決定されていた。全世界に散らばった特派員やプロデューサーたちが、アイディアを本部へ送り、さまざまな指示を受け、その指示に応じていた。こうしたプロセスをへて、この日とりあげるニュースが、一分半から二分かかる八項目の特派員報告と、二つのヴォイス・オーバーと、四つのテル・ストーリーに絞られていた。ヴォイス・オーバーとはニュースキャスターが映像にかぶせてしゃべる方式、テル・ストーリーとはニュースキャスターが映像抜きでしゃべる方式である。どちらも一項目あたりの時間は約二十秒だった。

ところがたつたいま、とつぜんダラスから飛行機事故のニュースがとびこんできたために、放送開始まで八分足らずというどたん場で、番組全体を再構成しなければならなくなった。これからどの程度の続報が入るのか、はたして映像は手に入るのか、それはいまのところだれにもわからなかったが、ダラスのニュースを番組に入れるためには、少くとも予定されたニュースのうちの一項目を落し、ほかの項目を短縮しなくてはならなかった。バランスとタイミングを考えると、ニュースの順序の入れかえも必要だった。番組の再構成がまだ終らないうちに放送が始まってしまいうだろう。それはよくあることだった。

「おいみんな、構成のやりなおしだ」インゼンがてきぱきと命令した。「ダラスをトップに持つてくる。クローフのテル・ストーリーでゆく。続報はもう入っているのか？」

「たつたいまAP電が入ったところだ。これだよ」答えたのはニュースキャスターのクローフ・オード・スローンだった。渡されたばかりのアソシエテッド・プレス（AP）のニュース速報のプリントアウトを読んでいた。クローフ・オード・スローン、ウィークデイの夜はほぼ毎日約千七百万の視聴者に、おなじみのいかつい顔と、白いもののまじった髪と、突きでた顎と、高圧的だが信頼のおける態度を見せるこのニュースキャスターは、エグゼクティヴ・プロデューサーの右隣りという、「蹄鉄」^{ホースシュー}のいつもの特等席に坐っていた。クローフ・スローンもまたニュース報道のヴェテランであり、昇進の階段を着実に昇ってきた人物で、ことにCBAのヴェトナム特派員として脚光を浴びてからの

活躍ぶりはめざましいものがあつた。その後ホワイト・ハウス担当をへて、三年前から夜のニュースのニュースキャスターを務めている現在は、全国的に知られた有名人であり、メディアのエリートの人だった。

あと数分たてば、スローンは放送スタジオへ移動することになる。それまで、テル・ストーリー用に、すでにダラスからスピーカーフォンで送られてきた第一報と、AP電が伝える追加の事実から、放送原稿の材料を拾いだすつもりだった。すべてのニュースキャスターが放送原稿を自分で書くとはかぎらないが、スローンはできるかぎり自分で書く主義だった。しかも今日は大急ぎで書かなくてはならなかった。

またインゼンの大声が聞えた。エグゼクティヴ・プロデューサーは、当初の番組編成表を見ながら、三人いるシニア・プロデューサーの一人にいった。「サウジ・アラビアを落そう。そしてニカラグアから十五秒削る……」

スローンはサウジのニュースを落とすという決定を聞いて、内心たじろいだ。それは重要な項目であり、サウジの今後の原油マーケティング計画に関して、CBAの中東特派員が送ってきた二分三十秒のよくできたニュースだった。しかし他局も今夜じゅうにそのニュースを流すだろうから、明日になればなんの価値もなくなってしまう。

スローンはダラスのニュースをトップに持つてくるという決定に反対ではなかったが、予定した一項目を落とすすれば、ある上院議員の不正行為をあばく議会関係のニュースだという考えだった。その上院議員は、選挙資金献金者であり個人的な友人でもある人物に恩恵を施すために、巨額の政府支出案に八百万ドルをこっそり上乘せしたのだった。この不正が明るみに出たのは、ひとえに取材記者の粘り強い調査のおかげだった。

このワシントン関係のニュースは、派手ではあるが重要性の点ではサウジのニュースよりも劣った。議員の腐敗はべつに珍しいことではなかったからである。しかしこの決定はいかにもチャッ

ク・インゼンらしい、とニュースキャスターは苦々しく思った。またしてもスローンの重視する外国ダネがあっさり削られてしまった。

この二人——エグゼクティヴ・プロデューサーとニュースキャスター——の関係は、もともと決してよくはなかったが、この種の意見の相違のせいで最近はいちだんと悪化していた。彼らの基本的な考えは、毎晩どのニュースを優先的に取りあげるべきかだけでなく、取りあげたニュースをどのように扱うべきかという点に關しても、日ましに亀裂が広がってゆくように思われた。たとえばスローンは数少い重要項目を徹底して掘りさげるやり方を好むのに反して、インゼンのほうはできるだけ多くのニュースを詰めこむやり方を好んだ——彼の口癖によれば、「そのうちのいくつかは速記で報じる」としても、である。

これがほかの場合なら、スローンはサウジのニュースを落すことに抗議して、たぶん自分の主張を通していただろう。ニュースキャスターは同時にエグゼクティヴ・エディターでもあり、放送内容にある程度口を出す資格があった——ただしいまはその時間がなかった。

スローンは急いで靴の踵を床に突っぱり、コンピューターのキーボードと正対するように、手慣れた動作で回転椅子を斜め後方へずらした。それから精神を集中し、周囲の雑音を気持のういでシヤット・アウトして、今夜の放送のオーブニングとなるべき原稿を打ちはじめた。

ダラス・フォート・ワース空港から、たつたいま悲劇の予告となるかもしれないニュースがとびこんできました。数分前に旅客機同士の空中衝突が起きた模様です。一方はマスキーゴン航空の満席のエアバスです。事故が起きたのはダラスの北、テキサス州ゲインズヴィルの上空で、AP電によれば相手方——小型機と思われる——は墜落しました。目下のところ小型機がどうなったか、地上で死傷者が出たかどうかについて、まだなんの報告も入っておりません。エアバスはいぜん飛行中ですが、ダラス・フォート・ワース空港への着陸を試みる同機に火災

が発生しているとのことです。地上では消防車と救急車が待機して……

スローンはキーボード上に忙しく指を走らせながら、今夜のニュースが終る前にスイッチを切ってしまう視聴者は、もしいるとしてもわずかだろうと心の片隅で考えた。このままチャンネルをまわさずに続報をお待ちくださいという、テル・ストーリーの結びの一文をつけくわえてから、プリントアウト・キイを押した。テレプリンターにも同じプリントアウトが写しだされるから、一階下の放送スタジオに到着するころには、プロンプター・スクリーンから原稿を読みとる準備ができているはずだった。

原稿の束を手にしたスローンが急ぎ足で三階へ降りるために階段のほうへ行きかけたとき、インゼンがシニア・プロデューサーの一人に質問するのが聞えた。「ちきしょう、DFWからの映像はどうなってるんだ？」

「それがどうもうまくないんですよ、チャック」プロデューサーは受話器を顎で支えて、メイン・ニュース編集室の国内ニュース・エディターと話していたところだった。「火災を起こした飛行機が空港に近づいているんだが、うちのカメラ・クルーは二十マイルもはなれた場所にいるんですよ。間に合いそうもありません」

インゼンは苛立つて罵声を浴びせた。「くそっ！」

テレビ界で危険な取材に対して勲章が与えられるとしたら、国内ニュース・エディターのアーニー・ラサルは大きな箱一杯分の勲章をもらっていたことだろう。まだ二十九歳という若さにもかかわらず、CBAの取材現場プロデューサーとして、レバノン、イラン、アンゴラ、フォークランド諸島、ニカラガアなどの動乱の真只中で、しばしば身の危険を冒してすばらしい仕事をやってのけた。いまもまだ世界各地で緊迫した情勢は続いているが、現在のラサルはニュース編集室を見

おろすガラス張りのオフィスの快適な革張りの椅子から、ときには国際的な動乱に劣らず厄介なこともあるアメリカ国内のニュース・シーンに目を配る立場にあった。

ラサールは小柄で華奢な体つきだが、エネルギッシュで、ひげをきちんと刈りこみ、服装は隙がなかった——彼を評してヤッピー・タイプという者もいた。国内ニュース・エディターとしての彼の責任の範囲は広く、ニュース編集室にいる二人の上級幹部のうちの一人だった。もう一人は国際ニュース・エディターである。二人ともニュース編集室にデスクを持っていて、ホットなニュースがとびこむと、それに深くかかわっているほうが席につく。ダラス・フォート・ワース空港から事故のニュースがとびこんできた——従っていまニュース編集室のデスクに駆けつけたのはラサールのほうだった。

ニュース編集室は「蹄鉄」^{ホースシュー}の一階下にあつた。ニュース放送スタジオも同じ階にあつて、こちらにはあわただしいニュース編集室を目に見える背景幕として使っていた。ディレクターが各番組の技術的な構成要素を組立てる調整室は、このビルの地下にあつた。

ダラス支局長からD F Wに接近する事故機の第一報が入ってから、ちょうど七分たったところだった。ラサールは一つの電話をがちゃんと切つて別の電話を取りあげ、同時にA P電の続報が写しだされたばかりのかたわらのコンピュータ・スクリーンに目を向けた。事故のニュースを確実にカヴァーし、同時に「蹄鉄」^{ホースシュー}に事態の進展を知らせるために、可能なかぎりの努力を続けている。

C B Aの現場に最も近いカメラ・クルーについて、がっかりさせるような報告を伝えたのはラサールだった——彼らは目下スピード制限を無視してD F Wに急行中だったが、それでもまだ現場からは二十マイルもはなれていた。その理由は、この日ダラス支局は多忙をきわめ、カメラ・クルーも現場プロデューサーも記者も全員仕事で出はらっていたためで、しかも運の悪いことに取材ででかけた先がみな空港から遠くはなれた場所だった。

もちろん、間もなくある程度の映像が送られてくるだろうが、それは事後の映像であって、壮観であると同時におそらく悲惨でもあるエアバス着陸の決定的瞬間の映像ではないだろう。また、衛星中継で東海岸の大部分と中西部の一部へ送られる《ナショナル・イヴニング・ニュース》のファースト・フィードには、どんな映像も間に合いそうになかった。

唯一の気休めは、ほかの全国ネットワークや地方局も、CBAと同じように現場へ急行中ではあるものの、まだ空港にカメラ・クルーが到着していないと、ダラス支局長が伝えてきたことだった。ニュース編集室のデスクでいぜん電話中のアーニー・ラサールのところから、いつものように放送開始前の活気を呈するまばゆいばかりのニュース・スタジオに、クロフォード・スローンが入ってくるのが見えた。放送中に画面でスローンを見るテレビ視聴者は、このニュースキャスターがニュース編集室にいて、その一部であると錯覚している。しかし実際には編集用ブースとスタジオは厚い防音ガラスで仕切られていて、音響効果を狙って意識的に音を入れる場合を除けば、編集用ブースの騒音はスタジオには入りこまなかった。

時刻は午後六時二十八分、ファースト・フィード放送開始二分前だった。

スローンがニュース編集室を背にし、センターの第三カメラに向かって、キャスター・デスクの椅子に腰をおろすと、メーキャップ係の女性が近づいてきた。十分前にニュースキャスター室に隣接した小さな個室でメーキャップをすませていたのだが、それからずっと汗をかきっぱなしだった。メーキャップ係は額の汗を拭い、パウダーを刷きつけて、櫛で髪を整え、さっとヘア・スプレーをかけた。

スローンがかすかに苛立った口調で呟いた。「ありがとう、ニーナ」それから原稿にちらと目を見て、いちばん上のテル・ストリーリーの冒頭が、前方のテレプリンターに写った大きな文字と一致していることを確かめた。テレプリンターの文字は視聴者のほうに顔を向けているときに読むた